



IB Learner Profile No. 1: Open-minded



心を開く人

校長 青山 直志

4月8日(水)本校の入学式が行われました。休み時間は一緒に遊ぼうね!と締めくくった式辞の中で、2年生以上にはこのように語りかけました。「君たちはこれから、ここにいる1年生のお世話をするのだけれど、学ぶことも沢山ある。それは「やる気」、ここにいる1年生はやる気のかたまり。もし、やる気を失いそうになったら、自分の1年生だったときを思い出してみよう。そこに何かしらのヒントが見つかるかも…」

20日(月)の全校集会には1年生も加わり、いよいよ本格的に菊の園がスタートしました。今年度は子供たちのどんな活躍が見られるのか、今から楽しみです。

さて、本校は、IB国際バカロレアのPYP認定校として、「探究」を軸とした教育を推進していますが、IBが掲げる「学習者像(Learner Profile)」は、子供たちが変化の激しい国際社会を生き抜くための羅針盤となる10の資質を定めたものです。今月号からシリーズとして、この10の学習者像を一つずつ紐解き、本校の教育活動や私自身の想いと重ね合わせてお届けしてまいりたいと思います。その第1回目は、「心を開く人(Open-minded)」です。

IBが定義する「心を開く人」とは、単に愛想が良いということではありません。それは「自分自身の文化や個人的な歩みに自信をもちつつ、他者の視点や価値観、経験に対しても心を開いている状態」を指します。そして、私自身がその体現者でありたいと考え、校長室のドアは特別な事情がない限り、常にオープンにしています。

校長室という場所は、かつては「何か悪いことをした時に呼ばれる場所」や「近寄りたくない厳かな部屋」というイメージがあったかもしれません。しかし、本校の校長室はそうありたくはないのです。休み時間、子供たちがふらりと立ち寄り、「校長先生、見て!」と捕まえた虫の話をしてくれたり、授業で作った作品を見せてくれたりします。先生たちも、教育活動のアイデアやちょっとした相談事を携えて、気軽に足を運んで来ています。多分、私が「ドアを開け続ける」理由は、物理的な風通しを良くするためだけでは勿論ありません。そこには、本校で初めて常駐する校長として「何でも気軽に話をしてほしい」という思いが着任当初からあったからです。

「心を開く」という行為は、実はとても勇気がいることです。自分の弱みを見せたり、自分とは異なる意見を受け入れたりすることは、時として不安を伴います。だからこそ、学校という学び舎において「相談しやすい雰囲気」があることは、子供たちの心理的安全性を確保する上で不可欠です。大人が心を開き、一人の人間として誠実に接することで、子供たちは「ここでは自分の意見を否定されない」「ありのままの自分でいいんだ」という安心感を抱きます。この安心感こそが、他者への寛容さを生み、未知の価値観に触れた際に「面白い、もっと知りたい」と思える「心を開く人」への第一歩となります。第一印象ガードが硬いと感じた人でも、こちらが心を開けば、不思議と心を開いてくれた…、大人であれば誰も、そんな経験をしたことがあるはずです。子供たちにも、鏡のように響き合う心の交流の中に、真の対話が生まれることを実感してほしいと思います。

校舎南棟2階の旧PC室を「相談室 兼 特別支援教室」として整備しました。その名は「ふれあいルーム」、SCスクールカウンセラーの来校日をふれあい相談日としていたところから命名しました。壁にぶつかって落ち込んだとき、不安やイライラが募ったとき、何か生きづらさを感じたとき、子供たちにはこの部屋を訪れ、解決への道筋を見つけてほしい。そして、それを乗り越える経験をしたからこそ、より「心を開く人」になることが出来るという自信ももってほしいと願っています。

